

子ども総合センターだより

あした

明日もしあわせ通信 (第78号) 令和4年12月

情けは人のためならず

毎年クリスマスの時期が近づき、クマのぬいぐるみを見るたびに連想する人物がいます。愛称で「テディ」と呼ばれたセオドア・ルーズベルト(第26代アメリカ大統領:1858~1919)です。

史上最年少(42歳)で大統領となった1902年の秋のことですが、大統領は趣味である狩猟(特に熊撃ち)に出かけましたが、獲物を1匹も仕留めることができませんでした。そこで同行していたハンターが年老いた雌熊を追い詰めて、最後の1発を撃つよう勧めたところ、大統領は「瀕死の熊を撃つのはスポーツマン精神に反する。」として断固として断り、その熊を逃がしてやったそうです。これが同行していた新聞記者により記事にされ、ワシントン・ポスト紙に挿絵入りで掲載され、読者から好評を得たそうです。(私の想像では「テディっていい奴じゃん。」と思った人が多かったのではないのでしょうか。)

この逸話に触発されてアイデアル社がルーズベルトの愛称「テディ」を付けて発売(ドイツの

シュタイフ社の説もある)したところ、このテディベアは大ヒットしたそうです。

その後、ルーズベルトは日露戦争の停戦を仲介し、その功績でノーベル平和賞を受賞しました。その結果、ノーベル賞を受賞した初のアメリカ人となりました。

「情けは人のためならず」(出典:新渡戸稲造「一日一言」の一節)とは、人に対して情けをかけておけば、巡り巡って自分によい報いが返ってくるという意味ですが、熊に対してかけた情けが、120年後の多くの人々の記憶に残り、今も賞賛され続けているという奇跡的な結果に対し、ただただ驚くしかありません。そして、今でも偉大な大統領の一人として認められているそうです。以上「ことわざシリーズ⑧」でした。(E・F)



適応指導教室「はばたき」

「自分の心を癒す場所がありますか」



「皆さんは、疲れた時にどのようにして心や身体の疲れを取っていますか。」

はばたき教室の子どもたちは、「自分の部屋で音楽を聴く」「YouTube(ユーチューブ)を見る」など自分がやっている方法を話してくれた。その中で、「祖父母の家に行ってお飯たきや農家の手伝いをする」と答えた教室生が3名いたのに驚き、同時に子どもにとって祖父母の存在の大切さを知った。

教室生が祖父母の家に行くのは、どんな時も優しく自分を受け入れてくれるからだと話した。自分がしんどい思いを話すと、祖父母は温かい眼差しで話を聞いてくれる。話しているうちに、悩みや辛い気持ちが薄らぎ、心が晴れてすっきりし、「また頑張ろう」という元気が自然に出てくる。祖父母はそんな魔法の力を持っているようだ。

自分の心が落ち着ける空間が、今の子どもたちにはあるだろうか。悩んだり、もやもやしたりする時、ゲームなどに没頭することで気持ちを紛らし、自分と向き合う事から逃げているのではないだろうか。お気に入りの場所で、もやもやした気持ちをすっきりとさせ、やる気を起こさせる「自分にとってのお気に入りの場所」を子どもたち一人一人が持っていてほしい。

はばたきのTEL 089-989-5022 直通の携帯 080-2974-4581

朝ドラで、ほっこりと…

一日のうちで最も忙しい朝の時間に、ゆっくりとテレビを観ることはなかなかできないですが、何とかやりくりして朝ドラを楽しんでいます。今回はその魅力についてちょっとだけ紹介しましょう。

王道ですが、主人公が自己の努力や周囲の人たちの支えによって成長していく過程を丁寧に描いています。放送中の「舞いあがれ!」では、病弱で引っ込み思案、母親の言いなりだった主人公の舞ちゃんでしたが、家族と離れて田舎にいる祖母に預けられ、祖母と二人で暮らしながら大切なことを学んでいきます。なかでも共感できたのは、自分のことは自分ですることと、失敗してもやり直せばいいから心配しないことです。当たり前ではありますが、物事がうまくいかないときに、このことを思い出して気持ちを仕切り直しするのもいいかなと思いました。

舞ちゃんは、寝坊して遅刻したり、お皿を割ったりするなど失敗をたくさん繰り返しながらも祖母や学校の友達、近所の人たちに温かく見守られ、次第に自信をつけていきました。大学生になった舞ちゃんは自己決定できるたくましい大人に成長しています。そしてなんと、パイロット目指して頑張るようです。これからもたくさんの困難にぶつかることと思いますが、どのように向き合い、乗り越えていくのか楽しみに観ようと思います。

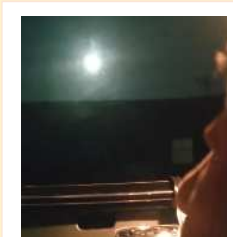


(K)

<センター長のつぶやき> 442年ぶりの夢

11月8日、仕事を終え一目散に久万へ。だれと今宵の天体ショーを見たいか。決まっている90歳になる母とである。

家に着くと母がいない。連絡すると、こたつの上の携帯が鳴った。近くの駐車場で、正面に月を見ながら母を待った。18時過ぎ母の車が横に着いた。



間に合った。そのままわたしの車に乗り、月を眺めた。母と月食など見たことがなかった。

「なんや月食か」「これから欠けるんか」。横浜の娘にビデオ通話をすると、夕食の準備中だった。娘も一緒に同じ時を過ごした。

「月が二つあるんか」母は目が悪いのだろう。

母と娘の会話を聞きながら19時16分に月が隠れた。「はじめて見たがや」そう、母は忙しくて月食など見る暇はなかったに違いない。母を家まで送ろうとすると、母が右手でつかんでいるものを見て「なんでお金持っとんや」。明日皆と日帰り旅行をすると聞き、手渡した小遣いである。すぐに忘れる母である。「みんなにおみやげかうけんな」。

442年ぶりの夢を共に過ごしたことを、いつまでも覚えていて欲しい。そう願いながら、輝きを増す道後平野を眼下に三坂路を下った。(DOIG)

<発達支援巡回相談> 絵本と仲よく

お母さんと面談をして、「お子さんはお家で何をして過ごしていますか？」という質問に「お気に入りの絵本を持ってきて読んでくれとせがみます。」という答えがよく帰ってきます。お母さんの傍で、好きなページをめくり本と親しんでいる様子が浮かびほほえましくなります。

今時ですからユーチューブやTVの幼児番組も当然見ているようですが、絵本は何より自分のペースでページを進めることができ、前のページに戻ることもできます。何度も何度も繰り返すうちに自分で読もうとするようになることもあります。

暖かなお部屋の中で、少し子どもに付き合っ
て本と仲良くなる時間を作
ってみてはいかがでしょうか？



(A)

伊予市子ども総合センター

伊予市尾崎3-1 ☎989-6226
(伊予市総合保健福祉センター2階)